

---

# Dream story

桜楼月華

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

D r e a m   s t o r y

### 【Nコード】

N 2 4 9 0 R

### 【作者名】

桜楼月華

### 【あらすじ】

とある休日。主人公の坂城里香は友人の香椎智香と共に買い物を楽しんでいた。

そして、智香があるゲームを見つけてしまう。「D r e a m   s t o r y」と書かれたそれは『夢』ではなく『悪夢』を通り越し『もう一つの現実』となることも知らずに…。

## 『夢』

この世には『夢』と言うモノがあるのは誰もが知っていると思う。

夢とは希望であり絶望でもある。見ることができると共に必ず覚めてしまうものだ。

しかし、もし覚めない『夢』があるとすれば、それは『夢』と言っているのだろうか。

坂城里香は、覚めない『夢』を『夢』ではなく『もう一つの現実』だと言うことにした。

その日、里香は休日に友人と買い物にきていた。

「ねえ、里香！これ凄くない？夢を見ることが出来るゲーム、『Dream story』だっさ」

里香の友人、香椎智香。金髪でお嬢様なオーラを醸し出しているが、実質、ただの学生だったりする。

「へえ、夢を見るゲームねえ…。ゲームなのに無料配布してるんだ。面白そうね…。試しにやってみようかな」

四角くて、少し大きいパッケージにはヘルメットの様なイラストが書かれていた。

「ねえ、早速家帰ってやってみよ」

「OK 私の家でいいよね？早速行こう」

この時、里香はドリームゲームの本当の意味を分かっていたいなかった。

この『Dream story』は覚める事のない『Another reality』だと言っことを。

## 『ゲーム』

里香と智香は家に帰り早速ゲームの説明書を見ていた。

「ねえ、これおかしくない？『ヘルメットを被ってボタン押すだけで脳の意識がゲームの中に入ります』って」

里香は不審そうにヘルメットを睨む。

「まあ、騙されたと思って試してみようよ」

不審がる里香に対し、智香は既にヘルメットを被っている。やる気満々だ。

「はあ…ま、智香がそう言うならやってみいけど」

「さっすが私の友人！さあ、ボタン押そう」

ヘルメットのコンセントを差し込み準備をする。

「それじゃ、行くよ！」

二人同時にボタンを押す。…すると、意識が遠のき二人の体はベッドに横たわる体勢になってしまった。

目が覚めると、大きな木が立っていた。

「おお…これは凄い。…て、ええ！本当にゲームの中に入ったの！？」

里香は辺りを見渡すが大きな木が立っているだけであった。

良く見るとPCのキーボードの様な物とメッセージがあった。

「ニッケネームを選択してください」

里香はちよつと悩んだが、この際本名でいいや、と本名を入力する。

「種別を選んでください 獣族／戦士族／魔法使い族／天使族  
／悪魔族」

悩んでから私はこの手のゲームの定番であろう戦士族を選択した。

瞬間、体が青白い光に包まれた。

## 『別の現実』

意識がはつきりしてきた。目を開けると目の前に智香の姿があった。

「リカ! どうしよう。大変なことになっちゃった…」

何が何だか分からない。里香は小首を傾げ智香に問う。

「大変なこと?」

智香は気まずそうに語り出す。

「う、うん。あの…ね、私リカがこっち来るまでに時間掛かるかなって思ってたところ辺歩いてた人にいろいろ聞いてみたの」

リカは黙って智香の言葉を待った。

「そしたら、ね…。このゲームログアウトできないんだって…」

リカはログアウトできないというのが何を意味するのか、ちょっと考えた。

「うーん…え!? じゃ、もうこのゲームから出れないの?」

そうだ。このゲームからログインできないということは現実に戻ることにはできない。

「まあ、普通そついう顔になるよね」

男の声がした。声がした方向を見ると、紺色の髪で短刀を腰にぶら下げ黒のロングコートに身を隠した男が大きい岩の上に座っていた。

「どうも。さっき、そこら辺歩いてた人です」

笑顔でこちらに挨拶をしていた男はすぐに真剣な顔に戻る。

「どついう経緯でここに来たのかは知らないけど、ここに来てしまったが最後だ。このゲームは現実から目を背けたいゲームマニア共が集まる場所だ。ここでは現実に戻らないじゃなくて戻れない、だから」

里香の顔が青ざめた。里香はゲームなんて持ったことが無かった。PCも親のを借りていた。

勉強はできる方だったがゲームは全然ダメだったのだ。

「で、でも！それじゃあ現実世界の体はどうなっちゃうの!？」

男は冷静な口調で告げる。

「今頃お前等の体は病院にあるだろうな。：親が気付いてくれなかったら、まだお前等の部屋だとかにあるんじゃないかねえか？」

里香は「そんな……」と呟くだけしかできなかった。



## 『説明』

今、里香達は宿屋の食堂で男と向かい合う体勢で座っていた。黒いコートに黒い防具。全てを黒で統一し中途半端に髪の毛を紺色に染めた男の名は『アシユヴィン』というらしい。本名は教えないのが普通なので聞いていない。

「まあ、そんなこんなでまずは武器を買いに行かなくちゃな。武器なしでエネミー狩りはキツイし」

「エネミー…敵？」

里香はちよつとだけ嫌だ、と思った。ただのゲームもしたことのないのに、敵を狩るなんてできるか不安だったから。

「ここら辺のエネミーは弱いから身構えることはないよ。あ、でも注意しろよ。ここでの死は現実での死だからな」

「え！？そんなの初耳よ！絶対エネミー狩りなんて行かない！」

里香は身を乗り出し、アシユヴィンに向かって叫ぶ。しかし、声の調節をしていなかったせいで周りから迷惑そうな視線が多数あった。しかし、周りは迷惑などではなかった。珍しかったのだ。このゲームに女性がいるということが。

「おいおい、マジかよ。俺このゲームで始めて女性見たかもしれない。しかも二人」

「俺もだよ。ちょっとパーティーに誘ってみるか？」

「ダメだよ、アシュヴィンと既にパーティー組んでるみたいだしよ」

「てか、結構可愛いと思うのは俺だけか？」

「うむ、安心しろ。俺から見ても可愛い」

という感じの会話が聞こえてくる。最後の方の会話は里香にとって恥ずかしく、ゲーム仕様で耳からボンっという効果音と共に顔から煙が出る。

「…アシュヴィンって有名なの？」

智香がアシュヴィンに疑問を問う。

「んー、まあここら辺じゃあ有名な方だな」

「ていうか、このゲームの中にどれくらいの人いるの？」

今度は里香が問う。

「え？どれくらいって…まあ一万人以上はいるんじゃないかな」

「うわ、そんなに？」

「ああ、警察側はゲームの存在自体世間には伏せてたけどかなりの人が病院に運ばれたよ。すぐにゲームの発売を禁止させたけど、P  
Cからダウンロードする方法でゲームするヤツも現れてね。警察が  
すぐに犯人を調べたけど、結局まだ見つかってないんだ」

「…ま、そんなことはどつでもいいとして。武器でも買に行こうぜ。金貸してやるからよ」

アシユヴィンは立上り宿屋の出口を目指して歩き出す。二人も慌ててその後を追った。

## 『武器』

アシュヴィンに連れられ入った武器屋は木製の古い感じだった。だが、中に入ると思った以上に中は広く、武器も豊富。魔法の杖的なモノが売ってる所から大剣、両剣、少ないがナイフもあつたりした。

「うーん、武器って言ってもどれを買えばいいのか分からないなあ」

里香と智香は唸りまくっていた。大剣を見てはナイフ。ナイフを見ては刀。刀を見ては大剣、と言った感じだった。

アシュヴィンは苦笑しながら、二人に話しかける。

「そんなに悩まなくてもいいんだよ。ここら辺のエネミーは雑魚ばかりだからさ」

「でも、だからって適当に選ぶ訳にはいかないわ!」

智香が妙にやる気満々な感じだった。どうも、入ってきてしまったには仕方ない、とゲームを楽しもうとしているのだ。

里香も負けなくらい唸っていたが選んでいる理由は主に死にたくない、という気持だった。

純粋にゲームを楽しむ気ではない。

ゲームから出れることを信じて、せめて死ぬことなく生き延びたいと思っているのだ。

…だったら町で待ってる、という話したがアシュヴィンが何故かそれを許さなかった。

「まあまあ、騙されたと思ってエネミー狩りしようぜ」

何を言ってもこの言葉で返されてしまう。

「ねえ、私戦士族選んだんだし、大剣とかも使えるよね？」

里香がアシュヴィンに問いかけた。が、返事と言つには相応しくない返事が来た。

「お、遂にやる気出たか！まあ、ゲームの中に入ったんだし、楽しんで行こうぜ！」

と、無邪気に笑った。

「やる気出たわけじゃないわよ！まあ、いいや。それよりこの大剣は？いいの？悪いの？」

見せると「Holy large sword」と書かれている。

外見的には峰付きの大剣。聖を象徴する様な模様。色は黄色と白だ。

「あ、これって…」

瞬間アシュヴィンの目が丸くなる。

「すげー！これレアアイテムだ！NPCが経営する店の出入りを何千回くらい繰り返し返して、ようやく出る様な確率で出現すると言われ

てて、称は「ホーリー」と呼ばれてる。光属性の大剣の中で一番強いと言われ、聖の大剣として名を馳せているんだ」

その聖の大剣「ホーリー」はゲームマニアの心を大きく揺さぶった。

「なあ、リカ！これ俺が貰ってもいいか！？」

「嫌よ、私が見つけたんだもん」

「うう…そうだよな。ま、買っちゃまうか。他のマニアが集まってるじゃない内に」

そうして里香のメイン武器は「ホーリー」で決定した。

## 『フィールド』

武器を選んでから1時間が経過した。

智香は銃剣『flame breaker』という難易度が高めの武器を選んだ。

紅い刃の中にリボルバー式の銃が入っている形だ。斬撃より射撃の方が強いらしい。

『炎撃』という名称で上級者では好んで使う人も少なくはない。

アシュヴィンは全武器中最高レベルの破壊力、そして最高レベルのレアアイテム。

『thunder of beasts』というハンドガン。このゲームで数少ない銃系の武器だそうだ。

色は茶色と黒という渋い感じで、実銃をモデルにしているらしい。確か、『M1911A1コルトガバメント』をモデルにしているとか…。

『雷獣』と呼ばれ、その名の通り雷撃を発射させる。

「それにしても、私だけ完全近距離戦用だよな」

里香だけ大剣。他の二人は銃系の武器。

「大丈夫よ、私がりかと一緒に近距離で頑張つてあげるから！」

「俺も一応近距離用に改良させてるから、もしもの時が俺が全面的にサポートするよ」

「なんかその気遣いが胸に痛いよ…」

ちなみに、今里香達は草原系フィールド『燃ゆる草原』にいる。

(草むらフィールドの他には湿地のフィールドや、雪のフィールド。枯れ果てた草が生える湯地フィールドもあるそうだ)

草むらから覗いてくる兎の様な生物もエネミーだといふのだから驚きだ。

草原系フィールドにいるエネミーは殆どが非攻撃的なモノばかり。唯一、好戦的で積極的に人を襲いに來るエネミーは四足歩行のライオンの様なエネミーだそうだ。名前は『雷怨』。読み方、『ライオン』…。

首には鬘の代わりに電気が覆っていて、触ると感電でダメージを受け更に麻痺状態になるらしい。

麻痺レベルが高く十分くらい痺れたままで身体が動かないそうだ。

「動けない所を袋叩きされたら一溜まりもないから、注意しろよ」とアシユヴェインに言われた。

「あ、そういえばさ。噂で聞いたんだけど、ゲームでも幽霊って出るらしいよ」



アシユヴィンが急に恐怖話を語りだす。リカは瞬間的に岩の物陰に隠れて耳を塞いでガクガクブルブルと震えてしまった。

「…リカは怖い話ってというか、幽霊とかが嫌いなものよ」

智香が苦笑しながらきょとんと目を丸くしているアシユヴィンに説明を加える。

そんなバカ話しながら目指す場所は『雷炎の村』。そこには腕の良い武器職人がいるらしい。

ちなみに、このゲームでの武器加工はなかなか難しく、武器職人なんて片手の指で数えられるほどだと言う。

…足音を忍ばせて付いてくるエネミーに気付かないまま、村を目指す。

『初バトル（観戦）』

アシュヴィンが急に足を止めた。

里香と智香は顔を見合わせ何事か分からず首をかしげる。

「気をつけるよ。雷怨がいるかもしれない」

里香と智香はちょっと驚いたが、かもしれないという発言にちょっと安心してしまう。

その時、

「ガアアアア！」

咆哮と共に襲い来るエネミーがいた。

アシュヴィンは反射的に声のする方に雷獣を向けた。

そこには、やはり雷怨が立っていた。…立っていたって表現でいいのか分からないけど。

というかでかい。足を地面に下ろすたびに地面を揺るがしている。大きさは十メートルくらいだろうか。

鬣がバチバチと音を立てている。

「…大丈夫だ、ボス系雷怨じゃない。それなら、他のエネミーと変わりない」

アシュヴィンは引き金に添えている指に徐々に力を加えて行き…ガン！という音と共に雷が雷怨に向かう。

だが、雷と雷の衝突は思ったよりも軽いバシツという音をたてただけでこれといった効果音が無かった。

「ヤベ！」

焦りながらもアシュヴィンは腰に付いているナイフを抜き出し、雷怨の方に駆ける。

そして雷怨の前で大きくジャンプして雷怨の額にナイフを突き立てる。

「ガルルル！」

里香が雷怨の上にHPが表示されることに気付き、見ると今の一撃でHPは三割くらい減っていた。

アシュヴィンは突き刺した後、ジャンプして雷獣の銃口を雷怨に向ける。

そして、雷獣の弾丸を放つ。雷はナイフへと誘われるように方向転換し、そのまま雷怨の額へと攻撃する。

雷撃が終わるころには雷怨のは倒れていた。その後雷怨の姿は消えて行き、最後にアシュヴィンのナイフだけが残っていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2490r/>

---

Dream story

2011年10月8日20時10分発行